

書評 BOOK REVIEW

ジョー・ヒーリー [著]

河原理子 [編訳]

トラウマを聴く前に 知っておきたい10のこと

——当事者の声と取材者の実践

A5判並製・岩波書店

2026年3月刊

定価3,190円（税込）

評者＝齋藤 梓（上智大学）



小学校の火事に関するニュースで、当該校の子どもたちが、事件当日にテレビ関係者からインタビューされている様子を見た。こうしたインタビューに際し、インタビューをする人々は、自分のコミュニティで大変なことが起きたときの人の心の状態について、ちゃんと知識をもち、訓練を受けているのだろうかと不安に思った。「保護者の許可は得ている」というテロップが入っていたが、それだけでは十分ではない。大切なのは、インタビューを受けている子どもの心への配慮である。

『トラウマを聴く前に 知っておきたい10のこと——当事者の声と取材者の実践』は、2019年に出版された本を翻訳し、さらに日本版独自の原稿を加えたものである。編訳を行った河原理子さんは、以前、私が本誌で対談させていただいた方で、元々は長く新聞社の記者をしていた。犯罪被害の遺族や当事者、性暴力の被害者など、トラウマとなりうる経験をしたさまざまな方に話を聴き続けてきた方であり、そうした方々とともに、報道や取材のあり方をずっと考え続けてきた人でもある。当事者の方々が語ってくださったことから真摯に学び、その学びを土台としてトラウマに関する知識を深め、安全な報道と取材の在り方を考えていく本書は、河原さんのこれまでの道のりにも通じるものだっただろう。

本書は取材する人々に向けた本であるが、広く、トラウマとなりうる経験をした方にお会いするとき、お話をうかがうとき、どのようなことを大切にすることが必要かが記されている。トラウマを負った方に対し、誠実で真摯であること、トラウマインフォームドであるとはどのようなことか、本書を読むと体感され

る。被害者や遺族の心情は、当然ながら一人ひとり異なるので、具体的な対応を考えるためにはトラウマインフォームドな視点がなければならない。そのため本書では、被害者や遺族に関わる時系列に沿って、そのとき考えること、行うことや行うべきではないこと、注意を払うこと、視点や姿勢などが非常に具体的に綴られている。それらは実際のであり、かつ徹底的にトラウマインフォームドである。「はじめに」「アプローチする——もう乗り越えたと決めつけないで」「準備しよう——どんな感情もありえる」「関係を築く——共感とは」「子どもたちの声を届ける——パワーバランスに気をつける」「インタビューする——『いまのお気持ちは』と聞きますか?」「撮影する——業界用語を使わない」「原稿を書く——徹底的に正確に」「それからのこと——傷口を開いたのだから」「セルフケア」。この目次の並びを見るだけで、本書が伝える内容がどれほど大切なものか、想像がつくのではないだろうか。

本書を読み、取材のためのインタビューと支援は異なる点もあるが重なる点も多いと感じた。なかでも、私は、人生がプロセスであるという視点の重要性について思いを巡らせた。インタビューも面接も、目の前のそのときだけを考えればよいわけではない。その人がどのような経験をしてきたのか、なぜ今語ろうとしているのか、語った先にどのような状態があるのか、その人の願いや思いはどのようなものなのか、過去や現在、未来に思いを馳せながら関わり続けることが重要だと、本書を読み改めて考えた。

- 原書: Jo Healey (2019) Trauma Reporting : A Journalist's Guide to Covering Sensitive Stories. Routledge.